

概要

「中学校美術におけるピカソ作品の鑑賞についての考察」

教科・領域教育専攻

芸術系コース(美術)

本田 正史

1. 研究の目的とその背景

本研究は中学校美術におけるピカソ作品の鑑賞授業において、具体的な授業展開の試案を提示することを目的とするものである。

研究の背景としては現行学習指導要領での「鑑賞指導の一層の充実」と『鑑賞』に充てる授業時数の十分な確保」という改善の具体事項の存在がある。さらに「我が国の美術の重視」という内容に関して、それに対峙するところの西洋の美術、作家を厳選する場合に20世紀最大の画家であるピカソの存在は欠かせないものであるという考えによる。ピカソ作品を対象とした鑑賞授業の実践は多いが、多くの場合、ピカソ作品の全体的な総括や、キュビズムに対しての明快な指導が充分に行われていないことが、ピカソ作品の鑑賞を曖昧でわかりにくいものとしている。一方、多忙を極める中学校現場では「鑑賞の学習指導に利用できる資料の充実」や「実践方法の開発や啓蒙」などの課題が存在する。膨大で多様に展開するピカソ作品を総括的に整理し、鑑賞授業の展開を試案することは意義があると考ええる。

2. 論文の構成

序章 目的と背景

第1章 日本の鑑賞教育の変遷と現状

第1節 日本の鑑賞教育の歴史

第2節 新旧学習指導要領における

鑑賞に関わる部分の比較

第3節 中学美術における鑑賞授業の現状

第2章 ピカソ作品の総括的検証

第1節 作品の形式とテーマの変遷

第2節 ピカソの生涯の総括的考察

第3章 ピカソの鑑賞授業の展開試案

第1節 「ゲルニカ」を通しての鑑賞授業の展開

1. 「ゲルニカ」の背景

(1) 「ゲルニカ」誕生の歴史的背景

(2) 作品「ゲルニカ」の誕生

2. 鑑賞「『ゲルニカ』の登場モチーフを読む」

3. 鑑賞「『ゲルニカ』と『原爆の図』を

比較する」

4. 鑑賞「『ゲルニカ』を通してキュビズムを体験する」

第2節 ピカソの生涯と作品を関連づけた鑑賞授業の展開

1. 鑑賞「ピカソの生涯と作品の変遷を知る」

2. 鑑賞「青の時代と新古典主義の時代を

比較する」

第3節 ピカソ作品を含めた複合的な

鑑賞授業の展開

1. 鑑賞「自画像の個性を味わう」

2. 鑑賞「選択美術における作家調べ」

終章 鑑賞教育の今後の課題

3. 論文の概要

第1章 日本の鑑賞教育の変遷と現状

第1節 教育内容は時代の変化、子供たちの置かれている状況の変化により、幾度となく変遷し、今後もさらに改訂されていく宿命を背負っている。日本の鑑賞教育の歴史を検証することによって、変遷してきた鑑賞教育の目的や方法論を整理する。

第2節 教育現場では、現行学習指導要領の

十分な理解が必要とされるが、特に改訂部分についての理解はまだまだ不十分であると考えられる。ここでは新旧学習指導要領の鑑賞に関する部分の比較検討を行い、現行学習指導要領での中学校における鑑賞授業の指針を明らかにする。

第3節 新しい教育課程は平成14年度から中学校現場で実施され、今年度で3年目となる。日本美術教育学会が2003年に行なった全国調査をもとに、中学美術での鑑賞授業の現状を検証し、現場での鑑賞教育の課題を明確にしてい

第2章 ピカソ作品の総括的検証

第1節 ピカソが生涯に制作した作品数はあまりにも膨大であり、それが逆にピカソの全体像を見えにくくしている。教員自身もピカソを捉えどころのない状態として鑑賞授業を行っているのが現状であろう。ここでは約700点のピカソ作品を収集し、ピカソの表現変遷やモチーフ別による作品の分析を行い、ピカソ作品の全体像を総括的に検証していく。

第2節 本来、絵画鑑賞の対象は純粋にその画面上のみに存在する。しかし、中学生にとって作品と作者との関連を知ることは、作者の生き様や作品の背景に興味関心を高め、鑑賞活動に積極性をもたらす。ここではピカソの生涯や人間関係などを総括的に把握する。

第3章 ピカソの鑑賞授業の展開試案

第1節 「ゲルニカ」は鑑賞授業で最も多く活用されている作品であろう。ここではゲルニカの歴史的背景や、「ゲルニカ」制作の背景を明らかにし、「ゲルニカ」に関連する3つの鑑賞授業の展開を試案する。1つ目は「ゲルニカ」の作品内に登場するモチーフの意味合いを探るものである。2つ目は同じ戦争の惨劇を扱った「ゲルニカ」と「原爆の図」(丸木位里・俊)を比較

し、その表現方法の違いを分析するものである。3つ目は中学生がキュビズムの仕組みを理解し、かつ20世紀最大の画家であるといわれるピカソの良さや特徴を解り易く理解できる授業展開を試案する。

第2節 ピカソの生涯と作品とを俯瞰的に関連づけた2つの鑑賞授業の展開を試案する。1つ目は、ピカソの生涯と作品の変遷を関連づけた鑑賞授業で、ピカソを広く浅く1時間の授業の中で総括的に認知する活動を展開する。2つ目は、青の時代の作品群と古典主義回帰の時代の作品群を比較し、表現の特徴やピカソの精神背景を分析する鑑賞授業の展開を試案する。

第3節 ピカソ作品のみの鑑賞ではなく、さまざまな作家の作品を取り上げた複合的な鑑賞活動の中にピカソ作品が含まれる鑑賞授業の展開を2つ試案する。1つ目は自画像制作という表現活動に絡めた作家の自画像の鑑賞活動であり、2つ目は選択美術における作家調べの活動を通しての授業展開を試案する。

4. 今後の課題

鑑賞授業に対する美術教員の実践はいまだ手探り状態であり、鑑賞教育に対する考え方も大きく二分されている。それは昭和30年代の創造主義美術教育と認知主義美術教育との対立が現在の鑑賞教育にも大きな影響を及ぼしているからである。今後は、現在において対極的な金子一夫の「美術の内容的・形式的側面の方法論を理解する鑑賞授業」とアメリア・アレナスの「美術館における対話形式の鑑賞授業」との融合的な鑑賞授業の展開を模索し、鑑賞教育の目的と、その評価方法について考察していきたい。

指導 増谷 直樹